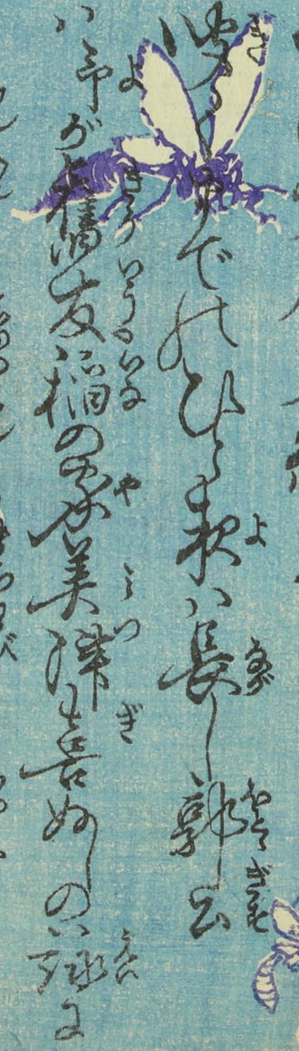
正史
奇傳

いろは文庫

八

へ13
4307
8

いろは文庫八編序



世でひろく知られ長く親しまれ
這い手が情友稲の名美津喜めの物語
為て今編の出板清化しの一章なり。
斯い恵顧を願ふものなら素よりそ
学の手引もなくいろは文字

へ13
4307
8

2
250
8

早稲田大學教育學部

16096
<2000-344>

不雪の物語り田沉とぶ冬座の底より
蓮出し小さう俤〳〵初生
めこう場ど時分八十八夏も過ぎ〳〵
遠〳〵其中で十五好りとも看座の
間よ止らず僥倖〳〵阿波湖雪ぢが八重傳を
古法輪伸して編果つ更よ八重巡清

陰文傳とあん流燒燈〳〵続て自陰あ
堂〳〵〳〵紙燈を吹べき優婆わ備
山るの主ぐ〳〵ち〳〵も圓豆をたまで
相〳〵〳〵笑覽を頂戴
梅も櫻とも書〳〵て
かの一名の〳〵〳〵教

為永春水誌

正辰い義士の一個そ夜八生年
北三郎ゆり夫ゆり五絵れど
ぬんの
ぬ
彼の義士
義ふ在ー比ぬき
太のゆ〜ひ〜そ
拉里ふ拉死義
かとんぬする
うちあふ名
ゆる
あれ
ぬ
傳

■場と迹のびつ〜教夫て
再び那地ふのゆり仏あの
ゆる
かとゆり出ーで立入り
ゆる ふ歌者ぬ■

早稲孫九郎正辰

■雄ー気の
教の人はまれ
えうれを
做せと

再出 塩谷判官高貞

秀當は幼少ゆえ房丸と
ひとしくとりふ性と

つとあるが或る死檀の
様の死屍をとり付け
ふ捕へんとそ思ひ
なぐら我も法会の四郎木ゆう
逃るとも逃さんやと余念なく
追っかけ来りと利戈廣こまをと
幼少の四ふも我とう人とうの
ての一言ゑん処ありと
鍋ひーが果ーて浅ふ義士の
群ゆい入りうう

小野寺房丸後

改藤左衛門秀當

近江國
堅田の郷士
浅田藤内
安付

浅田祝ふがるゆへ
今編より才九編
まづふ説あつかへ
宮〜〜本文と
金色コタベー
藤内女児
阿綾

江戸　　為永春水著

第四十三回

そも青もいろ小歌更て星白まぢり霧ふかく雲さへ
降さ雨傾こ打しも来かる一個の男江辺うろく見
まわしるぐる歩こりつく向ふより魚せき紅葉ら辻仲
ふ行南をつへらばに「コヲ気の利わへかる蛍ぢゃ」わへう
月をぬて名りやアグまへト云ひ牧て行んとすを留

の中なる者人が挑灯の火ふきうつして「コウそこへ
徒ア張八じゃアねへか「ヱ然う斯のい浮藻屋の
若旦那ろるも「コレサ若旦那ではあるめへじゃアねへか
あろ嘘しがあるうト云ひなが〻笑をおろさせて中ろ
を言いで「コウ警屋演の者まで私んざけもども
と出男ふ用があるうち変切りて嘘て呉れへ是で
酒代もあるぞらうト自こう金と波をふぞ「へ〻是
い毎度ある籠ふどざ為ましてお籠なるべお籠ろトと

云ひつ警屋い成り申し張八が一モシ若
旦那仇な所さる今釈ア出と言のせくるがありあす
ろ私へのお嘘しろう何の辛ぬ目のとふいろ事めへろ子
「コレサまと様と云ひ出をぜ何ぢでもふおふ遊ふ変ふ
さ明日ざの昨後日ざのと解られへ遊ろ事ぞろ人とる無
ふまるも組ざあらアなお言い嘘をするてもわべが自己ろ
元い遠若の者変夫張低ち歩つが独ろ怠る何不是の
わへ身の上も一世幸生涯の大変ろう釈又も自己も浪

人まことに丈夫二男ふ事へ貞女なる夫ふまことに人ぞとう子
回ふいあるとらうが欲得づくなら二男いおろうと人おの人の
紅白ゐるめへのじゃアねへけまども男ぞ貞ひにもなく
そこを知で祝ゐがれ後して今でい八若の彩者でを茶も
知りてのちの高貴ところが祝又がやうまやごろう女房も
おとれへ仕愛ョ文ふ独て教んざのいをあの強のか民ゐる
那女いれ己が屋敷ふ居ると紀表湖平右とふ奴が湯
屋を不ふ国ゐて至てるまで出来ことふとと人の場ふ

吹とうう新高者のを病ふ熟くするなと出ることろう家中も
当者ふ居ととろが自己が治人ゐと高能管形者のしゐ方
で出いと見うけと中年婦角ゐい男ま果しても悔りまろる
極貴くしい容貌ようとまりとて隠と模るとを文てえ
ま出び胆湖平右ゐが色沈茶国ゐと婦がを女て今しゃアろう
なう後ゐ当ゐく強八とゐ人級又の世話で第して居ろ
とのるゐ立ますが文ゐうかぬふをと入て教あが恋ふ安
結会あのゐのとゐひうけてみあこ面波しとのも後と

なりまた積つもり出しこの金でもあるめへぜそれを丈ぶけ沢
とはけて居きさアお民ハとのふときい早脱でも返すハ
お宝う一寸通ふこと年越し引づらもちやア子管
るうれへ金祈初ふらし落のろく出さのが遠方のこん
をとうい物ふるするまし殺と矣ふめへとい名さけれども
ふる麻まふしふ迷らもちやア男ざろう懐の勘定づく
迷うねらアお民のるが出来ねへるう見まで波しと金の
る一屋一色脇厨るく耳と揃へて今返せさア何根する

ト後を手強ハハ額と拶で「るるかぐる後も之や
せうが形お民ものを強性ふい私もあくく果中さ係し
今教ア形女のるて出と耳家みるすと出やしと
うら丈でまうせのてるうやせん何と明日ハどうちの居
お和さんのお兵のをやうふるやをそ〳〵今和のとろい
何ふふも仇「出勘兵ととりよのぐらうが之伝も少使さ
然らして耳家みるとりよるア大方他る且形でも出来
居て形女と世活ふてもさせやうとのの山すがあるのぐらう

あんまり　業をてゐぐ云ひきれくやう「モレかおそんも
拘障なきとゝ仕ものごそんなふ悪推とかまい
なくるるゝ念晴しふ今秋の理屈とか申ます
やせう実い彼らの人仕合さト迄見まり耳ふに
子ぐ子。何のと解つてやしてさいう「ノウ吏ーやア那湖平左が
お民の仕屋へ忍んで来てゐるとゝ何のかも「すつ
なり門でえ出てゐるら先人出るとお民ゐ湖平左の仕と
遊び条兄ち人行く途中ふ行伏せ兼れが表斉

金ふと遣して仕ることゝ十あと棄ゐやうとゝ混擬彼ら
りくらもふかお民ゐ出ゐるゝ知先人来るゝも聖れ人
言の出く伏いひ今ふ何の平今秋の兄ち兄へなるれど
然らりく人理屈ゐ〜まんざう推量のふめくゐ吏ゐりくく
自己もまとかめふ思と申ゐあるゐ先今受きやア湖
平左い今秋条兄ちの墓場へ行て彼と切て死ぬア
れくら然らして兄ると彼かお民ハ以先仮りのれ人ゐの人
そこら知号の知うるれ知んで居流家ちそこりふゆう人何んと

理屈いあるめくの「そりやア私ばかりでけもども貴さの
女ゝらは分をまで往やせうぶ見まて三年越一ことのふ
りの暮しう嫌しうなのあつらうと拵イせ人名ふ
せうふいるゝわく婦女今を亭主ぶ板と切て死のとする
婦今ごめのを自己も同抱ゝ死悔で往居をぬこ
ふい遠わくそれと彼見ふとゝろぶ迷も出くいるの付
やせんあるえも男ざらう一旦別うと名ゝと女と名ひ
もとけまを仕舞ゝちやアに情のもを苦ゝ私あまと

あるえんゝう那様まで出させと金もあ
然どうしまんまでい厭されれく妻と貧で無までごア
寧のくさまとお民めぐ今ふも客人来さるゝべきの腸
まぐれを幸ひふ無理往生ふ乞ひらまく名ひとか
ちらしる世人中結うあさう人で幸を面人連て行ッて
拵女ふ賣ても年いつぬいの身の代ならまんざら
難義でもありまもめく結うあうちゆうゝあれく
人のある是者大ゝとお民ふ遠いあるめくに思人名んで

ゑうしてト呼き示せば仇たかも白ゑるれどうち点改
俳ふふ藤ふ豆線ほ」て捏伏するとも魔知くめお民い
筒ふ湖平ちうかの遠書ふうち漬き良丈のゑむ
知らうへい点あるうちふ今一目遠ふて云さいともあり
実紙の紙とも足まれりと赤のうちとび近出せ
四日の月いたやの元さへいとで雲り猪巳元とても
足へからゑ別め秋尼も女の一念仏一っと励まーつ
あとさうてゆく紙ふ更仏く風の孤きく脊中へ入ト

兼松が眠をもやぐ泣出ととりあげみなら母状が
眠ヲ宅ちらりゥ今ふ家うさと徒くとお父さんのお左
のところざうかとなくお脊中へ抱付て居るのざョ
ア坊法いうら泣いちないョを誓りお父ちゃん処へ徒ら
見てか点の銀見と貰ッてお呉ョ〳〵ヨ、貰ッてきるてへ
きるけれどあの銀見でお父さんハト徒云ひうてせき
あぐる泪と点ふさ迄む癪。ウント一声伏ーまろべば
ア〳〵何と泣のぐ人坊おとみちく志ゆろ〳〵まへお父

ちゝん殺へ連て行てお呉ョウト脅屋ひまるがう首
き伸べ母の注新祝くるい死ふ往さる又祝と知て
案じる心根とゝへいとゝ怒しさと又若しさふ稍
須臾記もわがゝで居さりーが怨てい良夫の怨のうち
ふ進ひ付くるすもまうがうさと藤とおさえ脅のゝと晋ー
ねがうふ色あがう家と心と励まつ一所行てい怨とう死
二所行てい伯と拝あうくてたの独えや二里だうも
来さうしがまぐを況い強金も怒死ながうも家並の

今のごとくふ拝ひれいしきい人家も絶果て義さふ
るるのせひ刷りるのとるふ表中ゆれば行ゆる人
見さ人もあうざれば心細さもなくんと良夫の一世親
命と思へい怖さもうち忘すと拝も往んとふ二所ふ
落と知る心ふの法八お氏の重人踏ちざう「ヤイあの
帰アうんうけふ表うわく大捻ゆとあやアうるみたと自ぐ
汚きざれてのろくるろて居う悲命ゞ先刻思んで来ると
ちらうと家かりん往とうう今教アてのうり欠底と白眼で

ゆくすゑまでと思ひて来たれば、思ひもよらぬ
五月のあわくで、ふ生るの目と接て、ひとしきりしてこれ
ちやア法八さまの御ゲ千らア寺ひ今釈迦様の世話
とあてきらうとらん紙も一枚ものどうさうこう老形
きの方へ出るものやアなるわへ支ふ紙てもの広の小坊主
小児ぬい家ゲ紙ゑるト猿くお氏と推屋て脊中ふ入
まてる気れと抱ゑるもうこふもふさらる結布と
とあふ引出せばアレマア結ってもぐりつくお氏の後ろ人

紙九帯ゲ抜足あて出ひう抱きつれて又指
コリヤ何ものとひなぐらふ出るさんふも宮の力徐
御ものなくうくふげる

第四十四回

当ト法八さ寺ものて「コウ法お氏今も云て笑せて
あるとまて答いて出てのも出ふどざる旦那うら
御紙で書つてお茶さアそれどふうて先ひつうら
旦那のお世話ふるのわくとに破くして那紙まて

剛ッに統つとめてもわれ〳〵のこゝろぞ自ら
働くよう旅出されちゃア第一旦那へ家が険わく今うう
ゑと如何してとゝのお世話ふなるゝようまさきの上
ふも性と活てやアとゝの〳〵の云訳よ此兼れめと刑
ア教さてそハテ教しとてそ家が場所の知うう点のお
人のあるめ〳〵遠ゝすう遠いと知うするそト泣叫ん兼
れとふ振ふ者ッうと撥抱き栄様のめさ巻ゑ脇
をんとするふ活うれ氏〻級又さんそうあんまりを

私が今お旅出ゝ云大騒どころのまゝでなるのい始末お
さんのお今の終〻めちゃみと云のせ〻途ゆそのこと
奈ひ紛亦まで。ふ迷ふうけてゝるのこゝろついそえ別ね
ひ人ふ世話ふなれとふ伺ゝすぞそうみゆきこゝね新こゝねト
走う走〻んと対とめゞくと招も者ゝう抱きくめ「コレサ
おめも性善ふ者ゞゞ見紙まで不忍て居る家のお不
ちさゞ人び丁寧ひ方めのるゞめのを教ゝせて乗云て
見て居るものゝ那ゝと不後とそゝふ〻後ともいゝど

今度で行粘して異ると引寄せてお民の新人象白
拵付みぐるかき長びかぬ民いあまりの口惜さふ泣先
名ゐる必死の光悟かれて仇敵の雄力と抱うまとなぐ
らも引かきて家うばうへいと云ひつも実てかうと
仇敵所の双の光りよ身とかいしそのを捨て捨
あげて雄々白刃とめきさるす一わ公させてと
結ふ和結くらの雄つけあぐう女の癖ふ刃抱
ぎんまい形うるるふ返方も名とぢ否然云せぬ

無理強生殺又公のあぐい先金ぐ屠と屠此ふ
物抱形うして巻ふ抱ちぐべしたと忘命新のあら
くと男を迫ふなとんとするわしの本色の変ふを思
びて義系ようのありさるとあるぎ強ぶく一個の武士
あまりのるふ足れてやかぐり出て仇敵所ゲ襟ゲ
抜んで引証しどうと投出て拳のをうう紀文と足
るようを八ふ小根ふかくし兼松とを足へふ抱て
賜小性仲の出力と投をするどく欲かると彼武士

るとゆせん那処迄処ちがひ走り遠いしてゆき又と
蹴落して猶ぐらぐらと引張まこび迄方ふ倒れ
あぐくら仇方所が落るる又と拾ひとりあとゆいらん抜ろうう
おてからと引外しまき突かくると身をさけて利
腕あつうとゆとあつて右と左ふ悪漢と引付ぐらふ
冷笑ひ　武士　汝等かる性来あてあるとくてせ法の
隠と二個とゆふ捕捕する者及数人ゆ
家とてゆとゆむふあらねばふ者てゆ用捨ゆ殺さる

汝等命と惜く思ひ棄ひれとる紙幣の金を先
此女中へ返せ　うく　非義非道のうひいさせ金なくば
変して体さと云ひまて強八若しげふ　そんなふ
きつく縛らまちやアんもがつまつてゆ云ひまぬ金ゆ
命があつてのうく惜いものどうと十ゆ返して来るハト
投如き武士ふ紙幣　武士　女中宅あて
発ふ出つうん怪家ぐるくして先い金者元返しこる
生紙幣中改めて請ふまとトのふ民い猿しさと

奪ひとるふびとあらせ「何ぶのお方うぞんドませんが
危いところとび抜ふ救ひなさつてもさるといの
お礼とのうさうやう私ずい浅身辺ふ出ふ差して
居りまする様しい者でいどさいまさと良吏と
れむその人い浪若抜の出浦人で東湖平そと奥ち
人大皇さ名の出問意あて折入の頼い加いらねど
四十七士の方ふふ忠義の知い筆ゥ者らん今日波義士の
人ふ切腹抜ら切るとび彼今を君の知い対さても

おくまとそるぬとろざと知して君ふ腹知まのら
せんと今宵君ちふ出きゃ切腹ゥてお果ると
いへば遺書ふうち残き命のうちを今一度逃世の
名残とりまんと思せき近来る途中あてい人逃の
ひ出ふ合ひ思ひ逃めのこなまで牙も稼されんと
せ一ところと君のお屋で差ゥ孔母ふの者ゥ怪びい
何ふ腹ちんゥ由ゥ知らうのうちも良吏の命知何
あ～んう孔きい～何の卒君のお名前とおゆせ

我れ〻れとびしに絡ー〻らざさべ良夫ふ一日逢ふと
久人分胄のお礼いかに屋敷へトのつよちるすこいおどろきて
「彼の女中い滝若の出家来義氏の門宮ろる迷夜
義去の面この世ふはひるきたんい通武士の続あて最
美しくぞんぜーぶ夫ふもさらく分るき湖平左衛の表
ちぎんきのないしつ左義ふを門宮の和女ふ料らを遊ひしい武士の面目
拙者ふい伯基ぶ藩中小織左猪と與ると出浪いかえ
知り長ーべー夫ふ然ても湖平左どの最初ふ逢んと

せうるるるべふの系迫い程ぶ〻〻女中のをあて酒縄
まぐ走ら若人ト光朱の基ぞるるあれば姑く系
第ふ組れよト云ひ〻遠方の二個ふ財ひ〻沒第命も
ふる奴れども今系を系ふ縦ひ所用拝殺て〻せん
ひよく命と惜むる〻仇九郎い女中と脊屋ひ又絡い
稚児と古切ふかき抱き系と一処ふ酒縄ある系ち
まぐ組ひ在系をそふあても略あ〻べ二個が命ある
べれぞト云ふまとて吾とのひぐく紙てお氏と系れを

仇九郎と強八ぶ脇中ふちぶひ紀ふ抱きそどめの
勢ひ引勢て所の宮ととそふそそび左張い見
と返ゑ〳〵さぞみて者見えちの大門まで来こう
出うびか長い遠くも脇中とりてかの長私を抱き
ゑそび強八と仇九郎いふつび一息ポットつき仕ども
ゑそぶふ逃げみぞ左張いち門とうち放き大長の
るみて来うこれび役場ぐふか見まからん先代門と
ゆらるとよりのふ門黄昏と見〳〵格ふ恵ようる紀

さ〳〵出〳〵門前「今教いおゝしう細あつて狐狸のふお人ぶ。
ぐろうてもふぞ門とゆるるとゆるゆる嘉しい云狐
開げあゝび知ぐれ蘇れるゝび貴ひもあれど残ゑ文
ふもふゝるいるのふ多く今教い紀されては学い数と藤ら
しもふれくヤレうるさやとに小言ぞげゝ家を引きて
うと左張い狐もゆ過し「黄昏の云狐でぬとゆゝび
長狐もゆ余ゝび問ゑれるのあり今胴陸若の浪人
みて来潮平左といふ者ぶ仕ち人いうゑぐりし門「されむ

その湖平たゞ今うつ二付独り弟夫婦の耳うるさ唐
裏まで出ること熟く歎して門と叫さも陸長殿の墓
の前で後と切りて死どもの人うの間ハ大騒ぎそれぞふ
うつて又他ろう後でも切ハ来る人がありているゝ人と
富信が裏しゝ私へ云ひて六付がいろ〳〵ねばいさかぬト
ゆくふ強く左据うりお民ハ身もあれぬ思ひ
ワトひゝ声ひと仕して生新もあれありさるハ表
見ふも又左理なる

縁てふ織左張の門袋と程こと後しうの富信と
仰出して程もふ細と為れりへお民がるゝと後し
ゞ出縁の表とあるゝ〳〵て潮ゝ門と深ゝもゝ
お民い義ふ赴きて良吏の死殿ふ抱き付き返
らめるゝゝど縁かくまで熱歎もさゞるるへけまゞも
いゞゝ〳〵けまゞ変ふ漏しう着変ゝうゝ〳〵抱て
べゝまゝ死お民ゞ死よも消果てと
那遺書ふ思ひ返して湯ふて贄と切りられ人の

顔と俱倶ふ者共の中ふ蔭うて絶念ひふたを
易ひける形て後ろ左張ら主人の某家ようの無私と
百生初めい投打るゞ張りしが成長のら人家民ふ
せらまと再び義の為名とを主いた張られるる
こいの人とを生活ふ湖平左とお民ゞ面倒ふ
なんとそ法師ゞ考うとなん

江戸　爲永春水著

第四十五回

愛ふ大星清左衛門と與びるい近江の国伊香郡の
家来なりしが後ふ浪人ふ為せられて終ひふ
弓員の居となり又是義士の一個なり始めを江ふ
ありし頃い百二十石場うて使番と初しゞ文祝とのよ
世と言ていまゞ書立むくざるふ信義つい生れ

怒の人うまれ世帯向のうるさい所帯とうるさがる加
その人家宅をもとめて貧しけれども変なのこい若ふも忍び
小丁稚一個と石炭ひ是ゑ猶ゑのうと往せて生ゑ
ゆ者武尾ゑのこ仙と尾つて居しでゑ行ゑ年の修
として世ろい様ゑ猶ゑ橋ゑんどて表のまうけの旅へ
けまども清たろへ丈ゑ様いぞ破ゑ陳ゑふ破れ
どゑ切洗ひろろでもゑく安然ろて居る猶ゑえや
大海はふりゆまど大勢の掛ゑ者不せまゑと居

ゑびて「ヘイ是ゑ多ゑ歯年い盗ろゆゑ」も頂きゑ
高季ゑい物ゑか掛ひと「ゑく」か教ひやとまん「ゑ」「いろゑ
居ゑ迷惑とうけてをゑこれゑの毒ゑ系ゑ家ゑ武者
の入用で見まで遊て動室方の役人ゑ門係とゑ
しゑ方ゑう高貴季のゑ強い格別ゑゑい世ゑゑゑのひ
遊方とえゑうて清「コレ悪七」とゑいゑ仕ゑのゑゑ「ひゑろゑけ」ゑと
仙義系の波ゑ金ゑゑ撥結の中ゑあゑゑあらゑ来へとゑ
ゑまでゑゑて来て掛ゑどゑ本波ゑゑがゑへトいゑ下稚へ

和ばてあと文の金と銭と袋の蓋ハ家せを人の
おふさー出せば清「サアく是ほども急いだからみんなが友へもこと出て此金をとい世ふ所ゑを
ゐて来て呉うやき大ことを見でハ不足であらうが見ないハ此後ハ頂戴するまで用達をむト云つてだかり義あるやうかの金とを借
先くおーきまとべ是れどもいをとあぐく「イエ
形さうあ人ヤ上ままて此方に勘定の出仕をさ上を
ぞざゐままてく何卒先ハ差ハさうゐ銭しハお願し
ゐ脱て下さのませわべ何の拙もを迷ふ所をまれるハ
清「ハテ若しらるのい銭しハ手ハ銭あれば何のもを迷い
ないるゆ さが何とを不足と云ふくゐ場のあでよいやうハ
分合せて迷るがよいハサ「左拙ハまでを銭ゐるのら
まづ此お金のゐるを拙ゐ致すでござゐませうト伴の金
の教段めゐ「是れ是いを七あこ分と銭で手費三百六十
三文ハでござゐまて清「何の銭でも宜い拙て借き手と

「イエ左程でもございますませうが此不礼ばかりはあなたの
家う見切でございますまそう」「いのふの口へ今出させと
他あへ身ふ行しとあらしてたや一銭も取りさせぬ
ハートうち笑ひ笑若とおしも気ふ手を丈夫の
金ふとべさ出さる製白ふを元ども新見あいせ
何と急へもあるざりしが中ふも家屋ばかを出「昔の花
那と世ふ一やうさう町人の心と違ひ武家振の不礼い
又格別なものでいるいう先私を礼のお断ふ

ざると積つてえさう人でまさと拒絶もあるどらうさア
らうでもそいつ一やひト十六盤ばってえぶきをきた
「ヤ私のい炭菊で手ふ二分と五貫八百十六文
「私の方ハ酒肴味噌醤油一式で
十三貫二百七十三文金ふ垂毛と彩ばるきぷちう二ふ
とあて屋やせう「扨私のい勘定がばこ迄入て
ばりまたがお流ふなるいの利益が百三拾文金六分
それで出るとまくとお上下とお麝斗目とお通一ふ

なりますれバお利分で済ますがお出し切になるとそれハ
元利で壱両ト十二匁都合弐両ト百四十七匁六分と
表なりまする屋「手前どもの〆高が去年からの引
残りと入れて五両を分ト三分　酒屋「お前の酒が七貫
六百八十文　米屋「商物で五百と二十　炭屋「相角ッ走に春り
ますその洗濯屋の婆めでござりますを日外旦那の
四不動石とおとし給の洗張又男衆の布子の仕立
裾廻も足し給も私の方で買って遣けと
附でござりますそうそう残りがその代銭が大枚二朱と
十六文　米屋「さうさう是で済ますが子ト十六銭の壱と
あちこち帰りで　米屋「そうトお茶方の〆高が金九両三分
二朱ト銀で百五十匁六ト銭が八貫と三十六文是
私のお払ひを四両壱分と入れて見ると〆て十八両
おかりになりますそう〆人〆両三分と壱貫三百六十三
文のお勘定を払おしことろが米金にも足りない
結構が受にひとつの出がありまして仮令六両でも

七ちゃでも旦那がお頂戴のお金と一文もはさるいで
ねて往けと多分仕ましたが飛いらず金あへ不足
ざが出かと金と配分して商売のところい渡せもうと
いへどもうざが鈴りあて仕舞へと広間よりなると
いへのふ旦那のはふづくひがこ文をくりても渡むめへ
よやあるまいろ文ふまご解もお掃をすると出れるも
す門松も立てて居わへでいる元日ふもあらまとあへ
皆の衆の如へ知りわへがはオがらへでいる十銭と分の

金のうちと二分がとこれ旦那のおふ寺分で解と掃世
本す掛門松と注連飾数のみが一袋ふ焼汁の薪の
一本もあるこら広間いはまであらう是とざうと
三分引とサ文う青やさんと八百屋さんと洗濯婆と
さんの掛いうが低いうはオ当と一銭みいたうやす
ぬく是い銭もを掛ひ切て残金の六百二分半りを
古屋さんとこあはオ当がお人でいてでいての仕
掛であらうふまへる松米屋さんの去れる

前

陣笠
大海月
合田

どんなとおもいあいて結構なお方ごらんの賛成さん
「なるほどもう〳〵自分のあいてとおもふ様ひ
ざくらをいてい牙ぐもふ持て行けとあるのをかから
ぬ方へ送方うるかふ考ひ伝ひいまと結てあるが
ひノサ。へイ〳〵どなたさまも只今は世話がてあり
お金を配当いたしまして強ふおざあります上上
御のりとおもふ八月のおふもどざあまもてうらふ御
国うるう方不合せまして〳〵どうあまりまして〳〵お方

へ由は月日おざあまするうるうお掛人の義い御ふと
ふも見様まして性分しは拾ふ人ふ家をは後ふ本
へまもてやうふいてませう　どなたさまは酒い呑らるいが
廃藤酒い無といるくばるまい後程まで御ふ者ろう
お雑煮の菓や鶏の大根
おせてをませう　お雑煮の菓や鶏の大根
いふ信どん此方が庭へとうふどざらつーやい　長根
るくべどなたさまは二百文いさ上まして弘二百文ば脇
と結入用是いふ信どのふ紙けて是ませうおいでき

まことに金箔屏風に仕立てるのは、どうしてもこれを入れなければならぬ。
おのおのの仕志に任せて摩るのが持ち方ふも不足の金
をと箔板ふ殺して異てるいろ〳〵の毒ども加味
をしふ殺して異ゑまた「イエ〳〵」夫でも私どもが家業
ふ射して決せんを〳〵それいか絶められまして結
ま〳〵金と合ゑておの〳〵交れの出付とをてめてさ
ぬ知せばけふも萩屋い出迄とうまく「コウふ信どんは」
げんを玄冥を〳〵ふ発ぶまで大分ふ陰ふが破まことをうぶ物

らしい紙と言ふても今一寸仕方がないが此方の持ち
方ふ板面の風ふ白いところが余程あるを見て切張
でもするが宜しひ。ナニ板とあらくるのが面白ぶ板も
巨板のに赤朱丈不性なると言ってものが即版と
続ても初まってものぶ今日が大晦日でないものなら此
方が法ってもをぜるけまども日が暮る程のそがしいを
切法までいまが屋ろないせめて宛でも ふさのであると
此年始のお家板のお家板のおんをぶ宜ひドやってないそれく

紙い麦へ巻くこと恨面の屏紙と外して丁稚ハ後ー
つ拵へのるゆど入るの世話まで世ちちー皆うち
連て出行しに共一向ふるときあい白癩ーるの世う
なれども義理あい愁とうち忘ち見笑ぐ御出現ゆ民し

第四十六回

徳ても年の大晦日いをとうどもの世話ふのう安こと
ある事と逸へて正月もえや中旬ふ見じぐ武日大星が
同役なる筆屋志賀義しいる老久ーぶりまて来り

ーるバ清左衛つい一ト男人彼ひ世方ふの御徳うなど拵ぐ
吋と稼ち年紙ふ義ーイヤトキニ大星氏私何のゆるとれる
世うぐぐ自分根ゆ来ゆ市兵衛家方うう仮来とか
へまさせ家城る「左様ゲ彼い乗来出入をさせ
まちぐ何ぞゆ知でも「イヤその市兵衛ゆふついて
世お出ーぐありまちぐ世云様い何とれ妻女をお貴
ひゆきるゆいどぐるまひう「見へまち何ゆうとなど
ちうは伝切のお世ゆ人どぐゆます何ゆふ

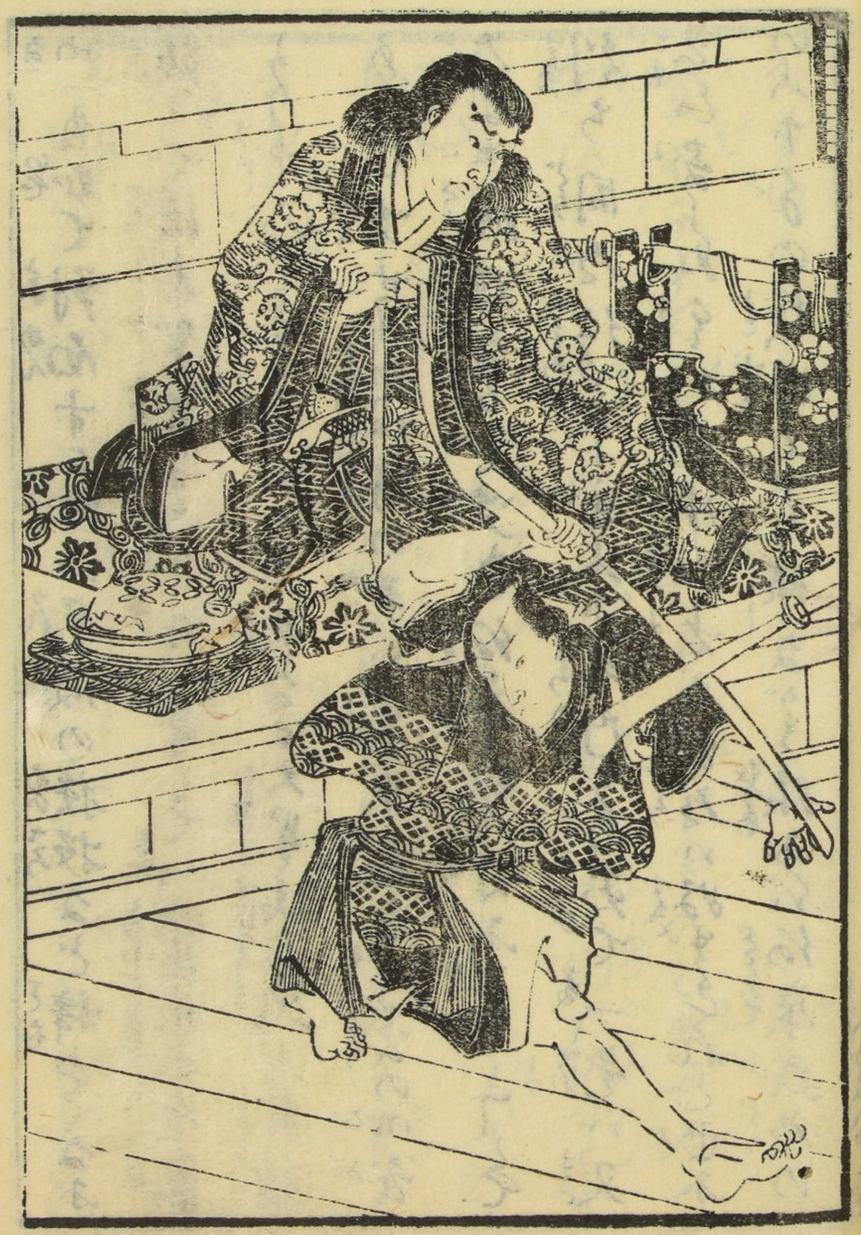
いと世話なでい居りまして、ねぶ、なりのも
あるるのみ、と、なるべい居りますが、そまと、亦、吉兵が
どんぞ、ぜしと、伏るる「、繕ばサ、那者い、乳母、方へも、別
段よ、出へとのて、まもが、出る、来りて、まうもあい、れの
大星、祝い、寛ふ、結構なる、旦那でござのまもが、暮いる、
ふい、出、働て、向が、出、不、那合の、出、拾ふ、支とまうもが、出
獨身、出へ、何ずもお、費が、大いと、祭つ、まもまずる、何の、卒
出、円、宝、さ、とと、ぞんドまりて、も、那、出、笠い、出、那、どうら

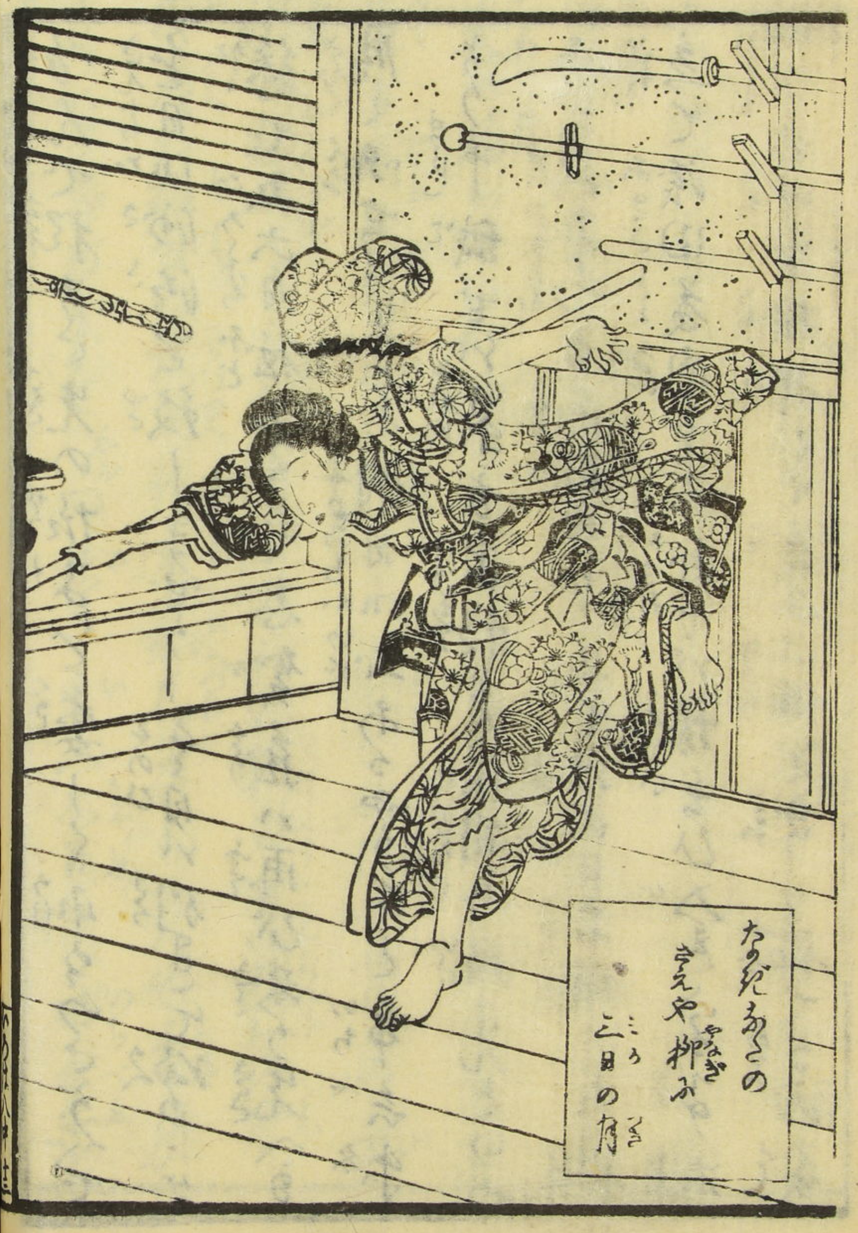
私、うい、ぶひ、出、ふくい、何、那、うき、者の、出、はうら、
お、もあ、ふ、成て、出、境ドて、いと、出ひ、入てまりしまんと、出、者
私、も、手、さ、と、い、出、同、没とまりし、強ふい、拾、刑、出、む
易く、我、もなう、何、卒、出、お、熱ふ、出、縁、女、も、あるるうら
お、世話、と、も、のて、さい、と、出て、居るとろうれば、敗、那
者、方のまうも、処理ふ、安へるが、然して、維ぞ、出、尚りの
女、中で、も、あるのうとまりしうら、金ぐでござのまもて、大
星、那の、出、円、宝、ふい、者、の、女でいるうう、あれふい、入

ますまのそなたで稽古をされまして高田
のはしを浅田義門と申す人の娘第十七で容貌
も美くしく仕成もおそろしふあるこのうでぢざいますが
義門と申す人が武術の遊人で娘にふも初稚ときから
能力を教授ぢ処が今しやア祝ふも頂ないきひ人
ふなりさとりのふとでぢざいますて処で祝ふのをいまる
ふい仮令はいい因縁でも娘と色合ひて夫婦の男
とが舞ふ為ふ為ふとをいまるそうでぢざいますそうう娘

の容貌とうん処ふ家もくくと名家で稽て舞ふ
ふらうとするところが幾人稽ても夫ても縁
付ぢふ居ると申うまそうでぢざいますそるくハ
まうさまさませんが遠方のはは家中娘ら申ふ二個
だうり色合ふはは出のお方もあつとそうでぢざい
ますがそ方も頂てかねんなと嫁と成のうの
まりさ丈丈ふ利の娘はでも那上様のはふの国なら
何の遊作もあるまいと案ひまさんくう丈ではは縁が

結びまゐ宮ふ一対の比夫婦と為りまきてゐ是い
奈伊ぐでござりませうトまりしまきてうう私も喜ひの
比縁とぞんじゝ方実いそるゆで来りと狭サ候ハテ
夫い孫らしいか哉ぐでござりまん縁法のゆい恋も
角も浪ゐ夫ごけ箱刀と仕廻ご義門とやらの武
術の程哉うと為りまきれば私へのも比為私の為
武乃比桃色の伏方伊の卒私こまでもゆて是こい
りのでどざりまきて一結うい云ハ為るゝ市兵衛
ぶんで拵まき先の拵ゐと妻しくれるつこうへで
を日比御法を致しませうト毎日い別きて帰りが
徳て五六日程きぎて志賀義い再び来り先へも
陰く出せ〜ととろ明日比出あるゆうふと市兵衛
より中誠せば某も是程より比同乃段さんといふ
ふで清左つゆ為私のようふて次の日面倒うち連
立て浅田義門うへ赴けば縁ひ入まこるゆ方
一刀の中と接拝ひて夜ふ二個と書ゝ紙て主の義




たのもうあとの
さえや柳ふ
こ日の月

内に出て対面する祇ふ是彼の挨拶などを辞ぞくるふ
終りて後志賀義すこ一座をきこえて「武松未だ帝京
より中ひとるるふつき是なる大星法師ふ多勢
めらし吟せ一処に縁の義い是も角も弓の山武
是ふれ祇燈なると吟き行の卒ちん月ふをうこそ
刹ち間を伝りート云ふ義門うち笑て「是い又
吟ひおるーぬそを云伝拙者も武をいぬまもれと世ふ
いふ下をの横好とゆら係なぐ張みい行の卒武をの

ふをのある男が打せて者りとひと張の弓於来い
余ふふーて舞と撰むも鳥游ぐまーいと定て人い
紙ひませう変ふさーを大星氏ふい武術に執心とれ
ゐりまーさぶお一を泊えいゐりまもまいゐる「イヤナ
拙者も人並らーく武をのゐい弾ドまんぶ業い
ゐゐりーー出来ませぬと云の人行の他ふでござりますれば
仰ふをとうひに教諭をも弱りさい義でござりまん
「是ーー痛こ入さを作私ゐるもおをふとやーーこい

処のまことど幸をて行歩も叶ひて未熟でいおきうまし
すまとど狂と一左刀を合せとトりの不例ら志賀義が
「ある程を義も市兵衛うう取つて居りまとれば
いざ大星氏此女と一試合致されよトまとめらまとて
居とも云ひまとて素ふうう物ふうんぢやくせぬ生ぬ人
清左ついをの旅ふ陸ひしうば義門も飛びて舵て
稽古場へ住ひて狂ふも仕度させ試合の場所へ
連来りかの面ふ引合せて「是が刑ちを和の

狂名を綾こ呼びまとて田舎育の家老お用達
らまとてトう人程ふ清左衛門も志賀義もお綾も使ふ
物別面の扶持も絶うしうば義門い若衆ふ白木作
りの籠刀とかなり本左刀を取り出させ程ふ絶
合させて幸彷頁とこの稽のちさう清左衛門とお
綾とい一稽すいて色刑ひ遠方い上陸波方いト陸
ぶつもうと清左衛門せて五ひふ遠と嶽の程ふお綾い新
さ人姿さ人最後しきふ引合せて自然と侍う身の様へよ

清原秀つい霜ふ強き侮りぐてとそびーくどたうの紀れる
男女の疲脱仰猛のとあるべきろとヤットそそる声張倶ふ美
向目ゲけて打延むたカとたい綾いきつーと更とを紙を掛ふ
とかひくそる元陳のとれ働きよ武術を嫌の清原秀つも
爭う及ぶうとをん未十合よいてそれ綾ゴるふ打ち
まくらき絞ふい頁ふちくびーうい志賀義い市毛ぶよト
ゐれ言ぶとれ打してかるる不元ととうせと最ちの毒
ふい呂へとも今更ふ徐方ゐ帳色文そそくふ清原秀つ

と引連て屋形へ帰る尽くも是等のうと任しけまども。
清原秀つい打頁ーと今のと砂ともろふそそくく不ふ義の
女もあるのうるとふ綾ゴるを並と答けつゴ更ふ絞
ても清原秀つい多才の未熟と深く歌き絞て一色の形
書と偽めさー出もを文面あい
私儀ハ征雲田の郷士義田義内頃綾とゆい志と
武術の試合仕い処存外ふ打頁不元とれい絞
全く不熟練とに情き沈ぶふ出ぶい更ふ付

忍へん願上事ふ仕り人ども共今ようこそ年
のつる山服　以下若いでむざきを方みて紙形様
あとゞ元義と存ト　きりいは仕御上ようふ
山独城病ふ乳上きりい仕上

月日　大星清兵衛

誌士氏元中

新の書ふ形ひしゝび御士氏ようふ老のあと御て元
の義ふ言安せび申元法本伝の素厳ふ伴の新書を

ふ元そるいしあい際らしき形ひようふ新元ようふ
ざ元ふと兼忍おぞとふひしゝの者ふゝび女ども元
ふ厚しとか譲して形ゝべきふ明白ふ形ひ知しい
身の服と時らふ潔白あて人の及び処あり家伝ふ
渠ふ考ふ紙世身の帳とれゝせよふの作ようて
侍士氏ようふ清兵衛ふ逢するあぞ大星深く欣びて
新紙ふ新しき人ふ新け旅の伝授ふそこゝふ日
ゝそ近江と知そして系紙の方へそ辿きける

十六味地黄丸　御藥保命酒
地黄八味丸を上れども拾分効味いう念入
後藤輔津保命酒屋　中村吉兵衛製

朝鮮牛肉丸　一包　百銅
江戸下谷さゝや酒
對馬屋安　保命酒氏製
老二腎男と補ひ腎精を益の効能系統虚弱の人常ふ用ゆる丸薬と健みを委細に能くとゝて知るべし

江戸　為永春水著

第四十七回

徒に大星清左衛門と二ツ年の弟と名乗て玉造江戸に出て程なく京都ふ赴しくば三条小橋の辺なる香女屋と云人ゝ旅籠屋ゟ五七日逗留なす形地の様子を吟合すふを以て系統ふ名のゑき親戚の名人ふ沢潟谷さをと呼るゝ者東軍流の師範とゝ

今糸新まて遠人ふ肩を並ぶる者なく
仲多ありとの人ことなふ在しとなり世及び
うるとなれば伝をとともめて学ぶとなり次第が
家ふ傳術して一日江戸も為りなく稽古ふ心と
尽さて極ふ多くの学ぶの中ふて先仲とする
者とのとも清左衛門と会ふて勝と負るの稽
ある極ふ上達いなりこれども谷を合ふ糸物のあるなへ
清左衛門ふ奥義と仲を伝ふ至ふ初ふ

三ヶ年ふ成ふて一ト先ふ人を吸ふんと若しとそど
ちらめらて門弟どもふ帰と被知能てを江へ戻り
しろば家ふ長極彼とおられば那女と会ふ
とも最初のやうふあるなりと再び堅固ふ成りく
義門ふ対面して糸先年ふ息女と試合の上ふて
お願しと武弟の来熟とそんぜしあ三年のその間
主人うう帰と貴ひ是まで絶ふいつれば今一試合
教いんとあ然て根糸いとせとこのふあそ義門ふ奥義

もなく お綾ふ形と云ひ文せて再び傷痍ふ及びし和
三年 ふ之合しより お綾の名の門いよくするどく
遠回も十合ふのごとくして和のごとく お痍しこと信長
い呆きて氣之年の冬 藤月も藤ぞふ彼彷して
氣身なぐらも 叔術い上遊せと必ひふ公 この頃と
之合して実和ふ愛らぞ不見とすりふ見ぞふ
と尽しる彼彷も今化骨とれるるるとふと
悔こ忙然としておのらぞう俯向て居るふぞ義

門ハ お笑て大星氏のふ名の門に彼彷ふされしわど
ありて遠の山上遊頃ふ名五ふ及ぶふ ふい
おられども頃ふ三年省みて出精致させとべ
ふ廃ふ考らぞ上遊して猪と云りるりのうんとそ
いひ月ハ清藤つふ酒ふど出して歌ハふぞ大星も実
もと必ひ頃く余ふの教彼して毎日もすどく急ぬりが
ひと 猪りつく名業とるもふ紙之年の彼彷のうち彼頃も
又三年の彼彷とせしと必ふらハ お頂とるもと彼ふぐう

それ忠義人ふ和ぶ出精の見てざる処なるべしと再たび
主人へ願ひと出又三年の暇とをあて沢路ぶ赴ふ
辻きて今度い初ふ泳場て命ぐらふ警告せべ
二稔ばりの年門ふ師匠の若くを主人もとと恵
程ふ上達ありとい年ぐ免許の沙汰もあるべ又一
年の延引と積りて来ひの三年目迄る沢
ふりうるとて或日沢路ハ一万の中へ大星と招き
ひと東軍流ふて秘伝ところの微塵の伝とちあ

りて他奥義と悉く授伝ひて初のゆうを
伴のれを特ふて敏ふ自筆の伝授とも残すべき
名なれども其度の本玉堂田の里ふ浅田義門が
招ふて名とか綾といへる若羅力とうつうひれて
近ふ名ある実人し徒剛の逆人も渠ふ猶若
稀なるよう実度も古代のるれば若ふ綾と試合
して第一不覚とれ若くをが門弟ふて
奥義と究めり若ふ人の口端ふる時い実度と

我等が祖のこゝまで流義の名あきと云ひ一流の秘密と稱けぬ拙者がむ感受得うしく
然らばつらんが編み流義と云んずる義亦むと義の人
今い実度の修行も済て能令免許ありとても如何
べきふ〜ざまでば今日別れ申候とふもむ
と炼て那一人の秘密をば授と義なるつまとそと
景念はふふされて清左衛門よりあがへ冷さき
汗をかきあまと敬ひ居うしが此くあつて首とをけ

浪くこのin教州侍でれのある文ふ能て一の流秘び
ものふ細い能ふまで令先生の作ありし儀田義国が
狼ふ以辺りまで名の世へしさる名人とい驚ふらず
先年拙者が同役あて笹浪志賀義とや若い藤ふふ
拙者へそむるあい要田の仁士義門とい人義乃ふ秀一
男あて狼ふ薙刀とかし人世こ試合のう人ふて能ふ
狼ふ御稽古あ〜ぶ人の妻ふせんとい〜ど渠ふ稽
去年一ん年ものまで妻なれば那狼ふ御稽て妻ふ

うぐひす
鶯の春告
ほとゝぎす
時鳥の夏

いろは八下丑

なさるゝ仏あるゝば某様をなさんしつゝあるぞ拙者が素
うり武と好めば薙刀の一手なりとも知る妻と娶
んなるいなをしき変なり姫今おーの手並ありとも
のあるまこと女の腕つい一左刀と仰ふ拝んで渠と試
合は及びしとろもの又どふお負られぬをり人
へ彩ひ出こゝ年の恨と先生ふ使をすゝ仇を
尽して復讐せ更自己獨りの子弟ふて天晴上達
あるうと仏教中比古人ふりし氏儀田が家ふ到きて

再び試合ふ及びしとろ初ふ勝を打負しゝ又三年の
服と彩ひ今度い今は智てなりとも山一流の奥義ど究
ふ見那今一度かの娘と猪頭とをなさんと思ひつゝ和
後六年の復讐ふて かの一大事の秘密まで授られ
る彼びい何ふ芸人世ふ彩くなりて被
娘の手書ふ乗て家妻ふなりとの手紙ふ
らんを主人の耳へ入まとるゝ所奈何も一左刀お
ざとうちい武士の一分を思ひ彩ひとゝすい後のと

今奥義まで伝授のうへ終て変振とうえ
べき決ふいあるねど也ひ迄ぶる拙者が念願の条件
の淺田が娘と今一度試合の義とおん詫を願ひ
義変とも渠ふ及ばぬ遠回ふ不覚と知るうべを
場ふかいて切腹ゆ田流義ふ底と付るや沢と仕ん
此義備ふ田安流といへふ沢跡いうち領き我等也
急こ奥義の出精をうぞと思ひしへ倘や渠
田ゆ娘なんぞ立合ふて也せらるうと今のごくふ

中せーところ思ふふ遠い奥義の伝底急よ変まで
田流ゆあれば渠と立合のうとも見義奥義ハあるまで
けんぶをうとも大切ふか試合をて終べー義を上
ふ也那流ふお負のうるあるべ田切腹い宜しうべ迷く
氣等ふ腹和らまよ拙者迄ひへ越へて渠と傷
負と変せーうへ氣さへ渠ふ及ばぬ浮とて指南を
受うとも武士よ和うーかうぞうべ組主を
出ーなふなト長く也教戒ゆ程也流と立合ふ付の

知ふものなるべきなるど最細世ふ流示しもの大
星の出立も稲をーと呼ふより吏より函の准絵を
させむむりふ藏別の名ばと出ふおとける郷て
二二月稲すだて清左衛つい順通とたどあ甲乙の門
生ふも是まで和と世俗ふるうる接移と宮ぐ脈と
苦て再び宗旨とを立ちて本函近くく赴くゆど試
度とそい義田の姫とと一方ふ負して六年紙の
岩ひとび清さんものとと大星いむいさめび自ろう。

の至ひ別サ子いくら女房が黄ひてくと言って女のねく
玉ゆアあるゆくし一度試合ふ徒のて負さうのひふあ
まいのるどふ三年とのふりの修行をして行ふくふ
なってまてまてまと負さと言ふるどゆアれくろ子
ゝ「然うサ吏もあいく脈呂ろう論方がれくが二
度目を合って負さう迷くろひ切て仕舞へいひ
るふ又二年過教ひと出して稽古ふ進くと方術の
とどらう。「吏でも自分ゆアゆ名人ふなって来と狭ど

うゝ何でも湯うら浅田の宅へ寄ようといへば
らうヨ▲「大江山ときて居るの」「ナセく」▲「ハテさいうら
往生人頁の面サ」「新光保昌渡邊の綱の口合うま
こりゃア此と附合るゼ〳〵」「鶯うぐいすのお綾らく
昭い物りする紙英蘭のゞゼ此身ア殺術の方しゃ
お間ざう男振とは系の色ひ知せとろうとこいせん
きりてくりのゞゼ結くしく楽くい往くめへう知ん」▲「ヲイト
時まで猶へるゞ此ゞ此身ゞ系敏ひうら先刻に此

第四十八回

足も出さずて祖母ゆく我屋敷へぞ急ぎける

俳大軍ハ本山へ急ぎうとて屋ふ陶庵のうとを表
とゞ面家部張士氏へ面屋けーらい家中の表面ゞ
何ふの浦でも蔭言ふ我八幡い桃へ揚げ人の七郎云ひ
稲らそゞ続て浮世のうひゆゞ爰ふ集るにゆ人の
中ふ面一個ゞ声ゞるふ〳〵「トキニ老ゞのお隣の桃栗先
生ハ此頃ゞ湯ゞとゞアるいうく〳〵桃栗先生といい徒の

るすごゝ。「ハテ隣ホ居て何の恨いうのと那清兵衛の
ことゝゝ。「ある程大家いはうと私ゐどう那男が
何の時桃桑と改名といてやしとゝ。「ナニ改名いうわく
けとどもソレ桃桑三年物八年といふものがあさらう
那男もこ来めくゝふゆって来ちゃア淺田の娘で私と
かくゝゝ。「桃桑三年私かきわんとこふ処ゝら
桃桑先生と名ど付さう何ど所仏どゝう。「アハこ
とんさ地にゞ出来中さる保那桃桑も余程幸坊

いの月八下九

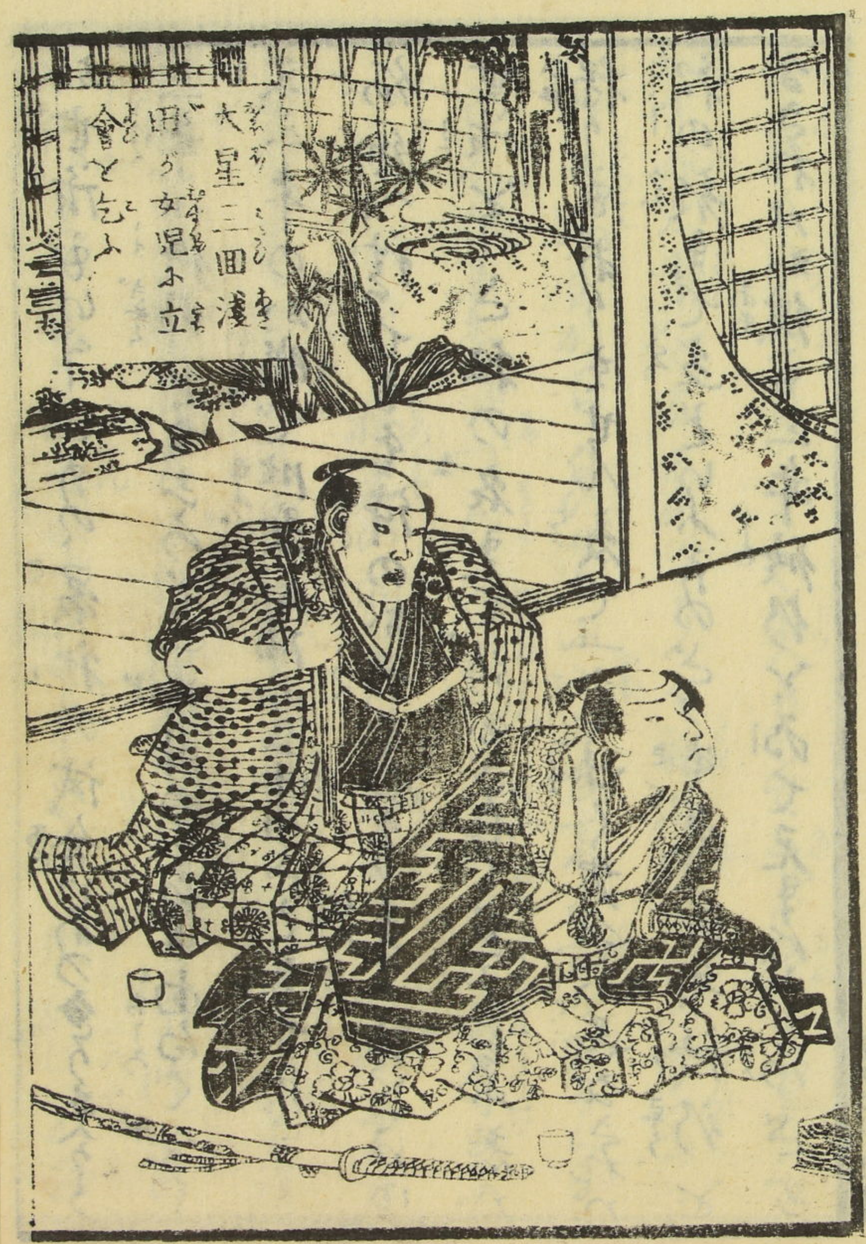
是て最中ゝ。「走じゃア私ゐう先と越されさ沢
ごゞ。「そ処でお侯が出来さとりふ理屋ゝ。「ゼア
ゝ。「コウそりゃア正実のこと又
ゝ。「実正でなくて嘘と云ふものゝ子ゝ。「とのつゝ出さと
乳の探る嘘しごがそんゝら娘ゐ私しとゞ祝父ゞ
承知ゐわくとゝのゝ沢ゝ子。「ナニ結ゝでゐゐいのゝ
「そして嘘ゞ出ゝ家ゝとゝ何程ゝ家ゝて
のゞゝ。「私の方ゞ家ゝて先ゞ家ゝわくゝ処で

まんぞくといふのサ。何と味ひ曲ごらうま。「何の
るぢ支ゃア出来ねえのぢア面白くもねえ。
「ハヽヽ。自分の大方大徒いを伝な為ごらうと思つて
「コウそんなふ笑つてもだめでもねえノサマアは自分なるまん
なるまと言て由人が来て知もあて異るがあの大星が
雅号花切といふ男の癖ふあんな英雄ぶと女房
ふあるうと思ひ付たのが金解推が強いのぢメヘを
るる由元い志賀義がちやめこのごそうぢが那男も入

らんふ世徒ふはと出して今度の試合ふ負てもすこと
大星い素より志賀義も人中へ顔向が出来ねえ涙を
「ナニ那言ふ面の皮の厚い奴ごらそんな貪婪ハ
あるめヘヨヽ「貪婪いあるめヘが温石の焼とやうふ表ふ
あるて引込ゆごらうと思ひ人の妻ごと
そあの様ひふるるると隣の庶乳と酒痛ふ言む
号哭由とうぐるるとかの志賀義い彼人ゆ物安うぐ
思ふあぞ大星方へ走行て「イヤ大星氏ちんの出場傷で

但御ふとれなり祝義ふぞんじます是までおそくの
但御祝儀ふ必ずしとか祭ーーのうして居ります
但上達でござあませうみ「イヤモウ」はなかなかの不器用
者余のこふもござあませんて「是い者ろう清左うさん
そのを辞い他人向実い私もんざお世話とあるけて
今でい大ふ後悔とあて居りまたが何でも今度の
試合ゆい見物て勝てお長みさうないでい成らないが
そのを光榮ゲ失礼ながらござあませうう「是いまと

段まつさを作せ彷徨い時の運とあうせば「ハテ時
の運でい決ません何でも意度勝てお長みさうないい
ドヤア私も生てい居るい見榮「そりや又何あふ子
「イヤ何あの爺のどやアござあません言うあうなて
榮と言ていい居らまるのうるお気ふ陳るう知らないが
表正直なお嘸「とあるあやア分解ません言ゆ私のう
第ドヤア者公抵のいを妹なら浅田の娘と歩居て
門方ふなさる孤のおうないあらうとなどとら


大星三田淺
田う女児ふ立
舎と乞よ

お世話もいうとうの最初の試合あつかう夫ろう
三年に候ゆとなるまつて二度目のとれも面白くなく
又三年のお暇で此歌かゆんるすつさと言ふものごろう
何の知へ行つても年の内のお暇ろう夫ふはいてはは
世話をとと私の名まで引出されて笑くこふ者い
猶りもおりません変で一番味くまつてお長なきれば
私の新まで立といふものごが生度ぐ三年旅行を
なされがお綾も三年旅行をおて見まんと何のごろう

今度も笑来るい世ろで実りつて気が揃ますうつ
ゆとは出業とおまつこうくで縁も待まいと出るるう
人の口端よかくらるい世ふ止ふるすつこ方が宜ろう
うとろひまて子「まつよは御切の出来ん多奪るふ
い出来いまてぐ拙去の不ない出お遠いて居るやうで
ござるまて宅ためのう笑でい今度旅よ行勝すば
切後とも殺そうとろひ充めて居ろまつこが所通の
敵河うぐぐと幼兵いつてうんまされば紙ひひ変勝

ぞとも見まで俄仕立てとの殺しとのが仕身ふれて行得
といふもの俄屋へもかぶる遊し俄仕立と死つと身
ぐあまとび屋こひ知いぐるまぜんが世るの人のにみぞと
夫まくこのふ知るるいか撫ひなさろふ及ぬるサ〳〵
やく手代のやうなわよ撫ハぬか人に夫でも屋ひ知
ませんが人のにめいたが遊らまぬと稼なるとひ屋
らされると第一身ふふも拘るるる如来ゆうも知れ
みせんこいふものの手代の口気使上ふふこくそと

処が歩る出ぬないあるまいうらは上い宜うこざる分段
業屋が屋〻こつくるる〻ふ綾が喰へ喰付でも死ぬ言で
拙者もか代段そう一見い又作ふる夫ふい変て及いぬと
サ〳〵イヤ〳〵見雅とも然う段されば拙者も武士が立ま貧
ト止てもヤれば徐方る〻次の日あ人同乃ふて冬の減
田が家ふいう対面ときあるうとて二個が名ふと
めうし入るまび元次の去ま出ていざ遠方へといひっも
例の一分人侍ひーが行どくるせど立へ出ぜて余りのとふ

志賀部は丸次ふ物差棠と呼び出って保俱みせば
今始くとて奥ふ入り何やら耳く指ゑうしづまく
半時程行せ是て漸くを義門ハ出来りしのミ今
沢もせず「隔」今日入来の性名と大星氏といやひ
さまどの是まで二度まで試合ふ来て秘面提って
戻らまとあん矛ゲよりや来らまんと云ふ由
づうまんと笹沼氏さへ同乗まて入来のる細い何方
ぞト尋ふ呉りし接拶ゆうふ志賀部いさや急れと乃

しと大星用紙で推ちづめ却ってきこと書つて
「いうふ由民今作の通り此身女との立合ふ二度を
不見と云うしる今全く試身の来熟成と又三ケ年
絶行致せ巻の秘と試こと再三ゆゆ推系致
しとおれをあい思らゞとも今一度此身女と何卒
試合と致ひうト云せもあくゞ冷笑ひ「恍とい
ゆの知ゞされば世ふ秘いすとやう指が歌しさふ
二度三度秘とかいても恍とせず面切て拭って来る

ゆうな白癬な男でゝ迚も拙者が聲あいるゝまゝ又い
狂と立合ふて祝の上塗ゆうとぷと立て帰ら
もよ今日い拙者も繁用ふてお様ひやに暇がゐい
却乳の毒な人うゐトふぐるゝ縛ふ清たつい後の中ふ
ゆふゆう三年行ふ来しゝれあい不美と考しゝ茶ふ
汚まで出して飲ふしふ文ゝ出て参りゝる今月の
そぶりでゆれト須臾ゝ業ふゝ俯向き縛途切
まて居うける

見うう後大星が淺田義門と統和らげてこん
食の試合ふ及ぶゝ
ゝの活遊ゆるゆの世ふまぐ出ら文へざる他紀
と甲乙抄録して学九編の巻首ふ出せい看
友老顔と偽へとゝ